

## プロジェクト紹介【寄稿】

# 中華人民共和国大明宮含元殿 遺跡保存環境整備事業

～文化遺産無償資金協力事業～

川田晋也

KAWADA Shinya  
国際航業株式会社  
国際協力事業部



### はじめに

ODA (Official Development Assistance: 政府開発援助) の無償資金協力事業には従前から「文化無償」という分野があり、個別のきめ細かい支援を行っている。比較的規模の大きい遺跡等の整備に係る途上国支援には制約があったため、新たに設けられたのが「文化遺産無償」である。

目的は文化遺産 (特に世界遺産) の保存に寄与する事業に限られており、観光資源の開発という視点だけでは援助の対象にならない。また、文化遺産の保存といっても、環境整備によって文化遺産の保全に貢献することを目指すもので、文化遺産に直接触れる「遺跡修復」については協力内容に含まれていない。なお、現在では、文化遺産無償も文化無償の一部として統合されている。

### 中国政府からの要請内容

中国政府から要請のあった文化遺産無償資金協力の事業は、唐時代 (618～907年) の王宮「大明宮含元殿」のそばで発掘された、王宮の屋根瓦を焼いた窯址の風化を防止して保存する建物 (覆屋) と、周辺で出土した遺物を分析・

保存・展示する建物 (展示室を持った資料館) の建設、訪問者の利便性に配慮した周辺の環境整備を行うという内容であった。

### 大明宮含元殿

大明宮含元殿は唐時代の首都長安 (現在の西安市) にあり、日本からの遣唐使が皇帝に拝謁した広大な王宮である。この王宮はヨーロッパの石造遺跡とは異なり、建物も日本と同じ木造であったため、土の基壇を残すのみで構造物は一切失われている。(写真1)

その上、この基壇の風化も激しく、放置すればやがて基壇そのものも消失する恐れがあるため、ユネスコは日本の信託基金を使ってこの基壇の保護事業を実施した。具体的には、基壇の風化を止めるために、基壇全体を石組みの壁と敷石で覆ってしまうという壮大な事業である。



写真1 唐時代の風化した宮殿の基壇

その基壇の上に建立されていた宮殿そのものは、当時の詳細な設計図等の参考資料が少ないため再建は断念した。そのかわり最上段には、大宮殿の威容を彷彿とさせる大柱の礎石を配置して、往時を偲べるよう工夫されている。(写真2)

### 窯址覆屋の概要

窯址から出土した屋根瓦は、高温で焼かれており、現在の焼成技術でも再現が難しいといわれるほど質が高く、国外に持ち出すことが出来ない貴重なものである。そのような瓦を焼いた窯址も風化が進んでいる。窯址は自然の土をかためてつくったもので、放置すると風化し、やがて崩壊してしまう。

これを建物で覆って保存した場合の課題は、その建物内の湿度管理である。覆屋で完全に密閉すれば、湿度が上って窯址が破壊さ



写真2 完成したユネスコの基壇保護事業



写真3 風雨に曝されていた唐時代の窯址



写真4 完成した窯址覆屋

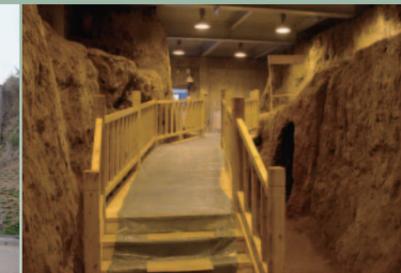


写真5 覆屋の内部 (左右の土が窯址)



写真6 都大路が復元された場合の含元殿周辺の将来構想図。中央が含元殿



写真7 中国政府との議論



写真8 景観保全のため、構造が半地下式の資料館。上部後方は含元殿

れてしまう危険性がある。(写真3)

日本国内でそのような施設を建設する場合は、湿度管理のための高価な自動システムを導入することが一般的であるが、そのための維持管理費用が高む。本件の場合、その維持管理費用の調達に困難であると考え、人手による管理法を採用した。(写真4、5)

### 協議・折衝の経緯

現在の西安市は、4000年を超える中国歴史の中心地に位置しており、市周辺には世界的に有名な遺跡が数多く存在している。秦の始皇帝の墓である兵馬俑もその一つである。

中国政府からの要請内容は、当初、文化遺産無償の予算枠を超えるものであった。そのため、予算の枠内に抑えるために事業内容の削減が必要になった。しかし、中国側の立場に立てば、後世から見ても恥ずかしくない立派な施設を建設したいという意気込みがあり、事業内容が縮小されることに警戒心を強めていた。そのため、協議は幾度も険悪な雰囲気

気になった。

無償資金協力は日本国民の税金を使って相手国を支援するシステムである。従って、現地に建設された施設は永続的に有効活用され、その国の発展に貢献しなければならない。それには対象となる事業が、その地域の開発計画や将来の土地利用計画と整合していることが前提条件となる。そうでない場合は、供与された施設がやがて取り壊されてしまう危険性があるからである。そのための協議にも時間を費やした。

その当時、中国では対象地域の都市計画を策定中であったが、中央政府の承認が得られていないという理由で、非公式に閲覧することさえも許されず、協議は難航した。(写真6)

### 協議・折衝の手法

中国の人々は広大な国土に暮らしているせいか、声が大きく、通常の折衝でも口論をしているように聞こえる。そこで我々も常に凛とした声で堂々と意見を述べ、自らを卑下しないよう心がけた。ま

た、歴史的に見て我々日本文化の起源の大部分は、中国文化の恩恵を受けているという視点も常に忘れないように留意した。

相手が言を左右にして協力内容が決まらない時は、折衝相手に面と向かって「あなたではなく決定権のある責任者と話がしたい」とも伝えた。(写真7)

これは責任者として協議に臨んでいる相手を最大限に侮辱する言葉であり、この協力事業そのものを頓挫させる危険性を伴っていたが、こちらの真剣さが通じたのかその後の折衝は円滑に進んだ。この時の責任者はその後どんなに忙しい時でも「ともだちがきた!」と言って時間を割いて会ってくれようになり、時折、宴席を設けてくれた。こうして資料館の詳細協議も無事に終了した。(写真8)

最終的には、中国政府の要請内容のうち、計画内容が将来変更される可能性がある部分は「協力対象外」とし、政府負担事業として中国側が実施することになった。後日、その事業内容を見ると、当初、日本に要請した内容とは大き

く異なっており、我々が安易な妥協をして整備事業を行わなくて良かったと安堵した次第である。

## ■ 工事中のトラブル

無償資金協力事業では、基本設計の終了後、閣議決定が行われ両政府間で交換公文(Exchange of Note)を結び、相手国に協力する金額が決定する。金額が決定したということは、設計の大幅な変更は基本的には困難であるということを示唆している。

しかし、中国側の考古学的事前調査が十分でなかったためか、工事中に予期せぬ場所に未確認の窯址が発見され、窯址覆屋の建設が中断された。しかし、これは覆屋の柱の位置を変えることで大幅な設計変更もなく対処することが出来た。その他、工事が進捗する中で、いろいろな追加要望が出されたが、その都度、協議を重ね初期の計画に比して大幅な変更がないよう問題の解決に当たった。

窯址の崩壊を防ぐために薬液注入の要領で水ガラスを注入して窯址を固化したが、これは中国の考古学研究機関で担当してもらった。(写真9)

## ■ 施設の維持管理

建設した施設の維持管理に関して特に注目されたのは、窯址覆屋内部の湿度管理と資料館の展示及び各施設の有効活用である。

窯址覆屋の維持管理では、湿度管理が重要な日常業務になるが、大型換気扇を常時運転することは電気料金が嵩み、管理者にとって負担となる。

これについては、展示室や窯址覆屋の入場料を電気料金に当てることで、換気扇が必要な時に運転できるように要請した。

遺物の展示については、中国



写真9 大量のパイプから水ガラスを注入して窯址を固化する作業



写真10 資料館内部の遺物展示室

側の専門家の主導で行われ、北京の国家文物局(文化庁)の専門家から高い評価を受けるほどの出来栄であった。(写真10)

これら無償資金協力事業で建設された施設は、日本からの観光コースにも入るようなので、日本人の目に触れることもあると思われる。

## ■ 予期せぬ出来事

このプロジェクトは、いささか「予期せぬ出来事」に見舞われた案件であった。

2003年4月、工事着工に際して伝染病SARSが中国全土を襲い、着工式等の公式行事は中止となり、当社の常駐施工管理者は滞在先ホテルで孤立無援となった。

海外からの観光客も宿泊しなくなり、最終的に泊り客は当社社員一人となった。食事は暇になった女性給仕5人が見守る中でとったが、王侯貴族の気分を味わうどころか、何を食べているか分からなかったという。

着工後1年で工事が完了したが、その時期には、尖閣諸島問題と西安大学の日本人留学生の事件が発生し、北京の日本国大使館前で日本の国旗が焼かれる事件が発生した。このため、日本国大使館員の中国国内における移動が困難となり、完成した施設の引渡し式等の公式行事は延期となった。

そして、さらにその1年後の瑕疵検査時には、教科書問題や小泉

首相の靖国神社参拝で北京の日本国大使館が被害を受けるという事件が発生した。

検査終了後、厳戒態勢の中、大使館及び独立行政法人国際協力機構の中国事務所への報告を敢行したが、中国の商務省や文物局への報告は取りやめにした。

結局、公式行事が一度も行われない不思議なプロジェクトになった。

## ■ 正式な酒の飲み方

中国で宴席に出席した経験のある人は、異口同音に「カンペイ(乾杯)には本当に困った」と言う。しかし、私の観察によれば、正しい飲み方を知っていればそうした“事故”を起こさないで済むのではないかと思う。

中国の宴席では、中国の人達はカンペイの形式以外では酒を飲まない。酒の入った杯には常に威儀を正して手を伸ばし、姿勢を正した後、感謝の念と共にカンペイの声を上げてから、おもむろにその杯を干す。酒好きの者からみれば、酒に対する礼儀を敬虔なまでにわきまえた敬意を表すべき態度であるといえる。カンペイの後には、ヨーグルトやジュースで胃の中の強い酒を希釈し、料理を食べ、胃の動きを活発にし、談笑し、次のカンペイに備える。

中国独特の強い酒「白酒(バイジュ)」を小さなコップに注いで一気にあおるのがカンペイである。



写真11 酒宴



写真12 ドアのないトイレ

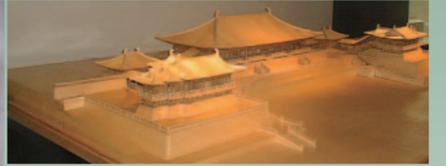


写真13 資料館に展示された大明宮含元殿の精巧な木製模型。実物大の宮殿の建設は認可されていない

原料は穀物だが、アルコール度数が日本の焼酎より2倍も3倍も高いのが特徴で、自分のペースをわきまえずにカンペイを繰り返すと急性アルコール中毒になる。実際に急性アルコール中毒で入院した日本人もいる。

とかく我々日本人は、カンペイが終わった後の談笑の間にも無意識に杯を口へ運ぶことが多い。それがボクシングのボディブローのように効いてくる。先方が言う通り、カンペイの形式でキッチンと飲んでいけば、悪酔いはしないのかも知れない。(写真11)

そうは言っても、困難な協議が終了して、うれしさのあまり多くの協力者と個別にカンペイを繰り返せば、地球の自転速度が急激に早くなり、左右の感覚だけでなく、宇宙遊泳中のように、上下の区別も失ってしまう。

## ■ 密かな苦勞

無償資金協力事業の実施過程には、基本設計調査、コンサルタント契約、詳細設計、入札業務、業者契約、施工管理、引渡し、瑕疵検査等々、種々の業務分野があり、その都度、協議が行われる。中国では、協議が円滑に終了した場合には労をねぎらう宴席が設けられ、カンペイとなる場合がよくある。

ところが、我々にとって不運なことに、本件プロジェクトの中国側責任者である西安市代表と陝

西省代表の局長の両名が、いずれもアルコールをまったく受けつけない人物であった。下戸の二人が自分の左右の席に座ったことを想像してもらえばわかる。「カンペイの国、中国でなぜ!」と天を恨む気持ちになった。

幸い、二人とも小啣が好きだということが判明した。確かめてはいないが、中国では昔から多くの小啣が親しまれているようで、局長が話し始めると出席者の皆さんが笑顔で聞き耳を立てる。仕方なく日本で小啣の本をかき集め、艶笑小啣も含め手頃な話の内容を暗唱した。それぞれのタイトルを野帳に書き写し、表題を見ただけで内容が思い出せるようにした。宴席で酔いがまわって話に詰まると、トイレに立って密かに野帳を開き、タイトルを見て話の内容を思い出すという方法をとった。おかげで、数回に亘る宴席は無事に過ごせたが、これをカンペイと両立させるのはいささか辛い業務であった。

## ■ トイレ事情

以前、日本からの観光客の間で問題にされていたのが、中国国内のトイレ事情である。大明宮含元殿管理事務所のトイレも、我々が昔、木造の小学校の校舎内で使った便所とよく似た構造で、小は一列に並んで正面の溝に向かってするのだが、大はそのうしろに並んだ個室を使う。小学校のト

イレとの大きな違いはその個室にドアがないことである。従って、小の途中で振り向くと、こちらを向いて屈んでいる人と目が合う。

世界的観光地である兵馬俑のトイレに入った日本人女性の話では、ドアがあっても留め金がなく、座っていると自然にドアが開いてしまうので慌てて飛び出してきたとのことであった。(写真12)

確かに排泄は人類共通の行為であり、プリミティブに考えれば敬虔な気持ちにならない訳でもないが、外国からの訪問者の通念を考え、せめて個室にはドアと鍵をつけるように申し入れをした経緯がある。最近では、どこでも改良が進められていると聞いている。

中国政府の事業費で建設された大明宮含元殿のトイレには、立派なドアが設置されているのは言うまでもない。

## ■ おわりに

スタート時点ではどうなることかと不安にかられたプロジェクトであったが、日が経つにつれて快適な方向へと進化した。途中、幾度も立ち止まることを余儀なくされたが、結局、完成に漕ぎつけた。最も重要な要素は人間同士の心情を伴うコミュニケーションであったように思われる。

真価が問われるのはこれからである。中国政府の遺跡保存に係る政策の中で、今後も大切に維持され活用されることを祈るものである。